

アジア・アフリカ言語文化叢書 51

# 『バーマティーン』の文献学的研究

島 岩  
SHIMA IWAO



アジア・アフリカ言語文化研究所  
東京外国語大学  
2012



アジア・アフリカ言語文化叢書 51

# 『バーマティーン』の文献学的研究

島 岩

SHIMA IWAO



アジア・アフリカ言語文化研究所

東京外国語大学

2012

Study of Languages and Cultures of Asia and Africa  
Monograph Series 51

## A Philological Study of *Bhāmatī*

Iwao SHIMA

*Edited by*

JUN TAKASHIMA & MASAHIDE MORI

First published 2012

Copyright © 2012

HIROKO SHIMA, JUN TAKASHIMA & MASAHIDE MORI

ISBN 978-4-86337-106-4

*Published by*



Research Institute for  
Languages and Cultures of  
Asia and Africa (ILCAA)

Tokyo University of Foreign Studies  
3-11-1, Asahi-cho, Fuchu-shi,  
183-8534, Tokyo

# 目次

編者序	vii
凡例	xi
はじめに	1
シャンカラ研究の歴史	2
1. 伝統的方法に基づく研究	2
2. 哲学的方法に基づく研究	3
3. 文献学的方法に基づく思想研究	5
4. 文献学的方法に基づく思想史研究	5
不二一元論学派研究の歴史	7
本研究の意義・研究の方法・論文の構成	8
第一部 『バーマティー』とその思想	11
序章 『バーマティー』の思想史的位置	13
第一節 不二一元論学派の歴史的展開	13
第二節 ヴァーチャスパティ・ミシュラと『バーマティー』	14
第一章 不二一元論学派における無明論の一展開	
—— 無明の基体に関する問題を中心として——	17
第一節 シャンカラ	18
第二節 マンダナミシュラ	18
第三節 スレーシュヴァラとパドマパーダ	20
第四節 ヴァーチャスパティ・ミシュラ	22
第五節 プラカーシャートマン	24
結び	28
第二章 不二一元論学派における解脱への道	
—— 『バーマティー』における祭式と瞑想と知識——	31

第一節	シャンカラ以前のヴェーダーンタ学派における祭式、念想、知識	32
第二節	シャンカラにおける祭式、念想、知識	33
第三節	シャンカラ以降の不二一元論学派における祭式、念想、知識	34
第四節	『バーマティー』における祭式と瞑想と知識	38
第一項	『バーマティー』における解脱への階梯	38
第二項	『バーマティー』における瞑想と知識と悟り	42
結び		45
おわりに		47
第二部 『バーマティー』 I.1.1-4 和訳		49
はしがき		51
テキストと翻訳		51
『バーマティー』 I.1.1-4 和訳」初出一覧		52
帰敬偈		55
『バーマティー』序論		57
1. 『註解』冒頭文の趣旨説明		57
1.1. ブラフマンは考察の対象に備しないという反対主張		57
1.2. 『註解』冒頭文前半部の語句説明		60
1.3. 『註釈』冒頭文後半部の趣旨説明 [I] —— ブラフマンは考察に備 するという教証		63
1.4. 『註釈』冒頭文後半部の趣旨説明 [II] —— ブラフマンは考察に備 するという論証		66
1.5. 『註解』冒頭文後半部の語句説明		69
2. 附託と無明		72
2.1. 附託の定義		72
2.2. 他学派による附託の定義 (1) : Ātmakhyātivādin		80
2.3. 他学派による附託の定義 (2) : Akhyātivādin		82
2.4. 他学派による附託の定義 (3) : その他の学派		85
2.5. 附託の定義のまとめ		90
2.6. アートマンに対する附託は不可能であるとする反対主張		91
2.7. アートマンに対する附託は可能であるという答論		98
2.8. 無明と明知		102

2.9. 認識根拠は無明を持つ者に基づく . . . . .	105
2.10. 世俗的な日常的経験には人間と動物の区別はない . . . . .	110
2.11. 聖典に基づく日常的経験も無明に基づく . . . . .	111
2.12. 附託の具体例 . . . . .	114
3. 本書の目的：ウパニシャッドの目的はアートマンの唯一性に関する明知を得るところにある . . . . .	117
<b>『パーマティー』 I.1.1</b>	<b>123</b>
1. ブラフマンの考究には目的があり、疑問の余地がある . . . . .	123
2. スートラの語義解釈 (I) —— 「そこで」の語義 . . . . .	124
2.1. 「そこで」の語義 (1) —— 「直後」という意味である . . . . .	125
2.2. 「そこで」の語義 (2) —— 「新しい論題の導入」の意味ではない . . . . .	125
2.3. 「そこで」の語義 (3) —— 「吉祥」の意味ではない . . . . .	128
2.4. 「そこで」の語義 (4) —— 「前に主題とされた事柄への論及」という意味ではない . . . . .	129
3. 何の直後にブラフマンの考究が開始されるべきか . . . . .	130
3.1. ヴェーダの学習の直後ではない . . . . .	130
3.2. 祭式の知識の直後であるという反対主張 . . . . .	132
3.3. 祭式の知識の直後ではないという答論 . . . . .	137
3.3.1. 理由 (1) 祭式の知識以前でもブラフマンの考究は可能である——祭式はブラフマンの知識が生ずるのに間接的に役立つだけでブラフマンの念想に祭式は必要ではない . . . . .	137
3.3.2. 理由 (2) ダルマの考究ののちにブラフマンの考究へという順序は意図されていない . . . . .	148
3.3.3. 理由 (3) ダルマの考究とブラフマンの考究には果報と考究の対象の違いがある . . . . .	153
3.3.4. 理由 (4) ダルマの考究とブラフマン考究にはヴェーダの教令の機能の仕方に違いがある . . . . .	154
3.4. 四種の条件の直後にブラフマンの考究が開始されるべきである . . . . .	157
4. スートラの語義解釈 (II) —— 「この故に」の語義 . . . . .	160
4.1. 四種の手段を得たのちにブラフマンを考究することは不可能であるという反対主張 . . . . .	161
4.2. 四種の手段を得たのちにブラフマンを考究することは可能であるという答論 . . . . .	162
5. スートラの語義解釈 (III) —— 「ブラフマンの考究」の語義 . . . . .	163

5.1. 「ブラフマンの」というのは行為の対象を表す第六格である . . . . .	163
5.2. 「ブラフマンの」が行為の対象を表わす第六格である理由 . . . . .	166
6. スートラの語義解釈 (IV) —— 「考究」の語義 . . . . .	168
6.1. ブラフマンの知識は欲求の対象か否か . . . . .	168
6.2. ブラフマンを知ることは人間の目的か否か . . . . .	169
6.3. 解脱を求める者はブラフマンを考究すべきである . . . . .	170
6.4. 『ブラフマ・スートラ』 I.1.1 の意義 . . . . .	171
7. ブラフマンの考究の意義 . . . . .	171
7.1. ブラフマンの存在はすでに良く知られている . . . . .	171
7.2. ブラフマンの存在がすでに良く知られていてもブラフマンの考究に は意義がある . . . . .	176
<b>『バーマティー』 I.1.2</b>	<b>181</b>
1. ブラフマンの定義 . . . . .	181
2. スートラの語義解釈 . . . . .	182
3. スートラの文脈解釈——ブラフマンが世界原因である . . . . .	184
4. スートラに生起と存続と帰滅だけが言及されている理由 . . . . .	186
5. ブラフマンが世界原因であるという推論について . . . . .	188
5.1. ブラフマンの考究における推論の意義 . . . . .	189
5.2. ブラフマンの考究とダルマの考究との違い . . . . .	190
5.3. ブラフマンは推論の対象ではなくウパニシャッドの文章の対象である	195
<b>『バーマティー』 I.1.3</b>	<b>199</b>
1. スートラ解釈 (1) —— ブラフマンは聖典の母胎である . . . . .	199
1.1. 『註解』の語義解釈 . . . . .	200
1.2. ブラフマンは聖典の母胎であるという論証 . . . . .	202
2. スートラ解釈 (2) —— 聖典はブラフマンを知る典拠である . . . . .	205
<b>『バーマティー』 I.1.4</b>	<b>207</b>
1. 聖典はブラフマンを知る典拠ではないという反対主張 . . . . .	207
1.1. 反対主張の趣旨説明 . . . . .	208
2. 聖典がブラフマンを知る典拠であるという答論 . . . . .	213
2.1. ウパニシャッドは祭式に必要なものを明らかにするためのものでは ない . . . . .	213
2.2. 先の様々な反対主張を退ける . . . . .	215



3. ウパニシャッドの説くブラフマンは知ることを命ずる儀軌の対象であるという反対主張 . . . . .	224
3.1. ウパニシャッドはすでに存在するブラフマンの性質について教えるものではない . . . . .	224
3.2. ダルマの考究とブラフマンの考究には違いがない—— および先の理由 (3) と理由 (4) の説明 . . . . .	231
4. ウパニシャッドの説くブラフマンは知ることを命ずる儀軌の対象ではないという答論 . . . . .	234
4.1. 祭式の知識とブラフマンの知識は果報が異なる—— ブラフマンの知識の果報は解脱である—— . . . . .	234
4.2. 解脱 (ブラフマン) は変異することなく永遠なので行為に従属しない	238
4.3. ブラフマンとアートマンとの同一性を知れば行為を介在することなく即座に解脱する . . . . .	244
4.4. ブラフマンとアートマンとの同一性の認識は想像上の同一視等の性質のものであるという反対主張 . . . . .	246
4.5. ブラフマンとアートマンとの同一性の認識は想像上の同一視等の性質のものではないという答論 . . . . .	248
4.6. ブラフマンの知識は人間の行為に基づかない—— ブラフマンは知るといふ行為の対象ではない . . . . .	251
4.7. 解脱は人間の行為に基づかない . . . . .	253
4.8. 知識は心的な行為ではない . . . . .	260
4.9. 以上の理由でブラフマンは知ることを命ずる儀軌の対象ではない .	262
5. ウパニシャッドはブラフマン=アートマンを教示する . . . . .	266
5.1. ウパニシャッドはすでに存在する事物 (ブラフマン=アートマン) を教示する . . . . .	266
5.2. ブラフマン=アートマンはウパニシャッドにおいてのみ認識される	271
6. ヴェーダの目的は行為 (祭式) を教示することだけではない . . . . .	275
6.1. 理由 (1) 現にウパニシャッドではすでに存在する事物 (ブラフマン=アートマン) が教示されている . . . . .	275
6.2. 理由 (2) ヴェーダの目的が行為 (祭式) を教示することのみにあるとすると、活動の停止を教示するヴェーダの文章 (禁令) が無意味であることになる . . . . .	280
7. ウパニシャッドがすでに存在する事物 (ブラフマン=アートマン) について教示していることの意義 . . . . .	291
7.1. 身体等をアートマンだとすると思い込みが取り除かれる . . . . .	291

7.2. 身体等をアートマンだとする思い込みは比喩的なものではなくて誤りである . . . . .	295
8. 『ブラフマ・スートラ』が開始された意義 . . . . .	299
<b>参考文献</b>	<b>305</b>
サンスクリット原典 . . . . .	305
翻訳 . . . . .	310
研究書・論文 . . . . .	312
<b>あとがき</b>	<b>321</b>
<b>引用テキスト索引</b>	<b>324</b>
<b>索引</b>	<b>326</b>
<b>編者あとがき</b>	<b>347</b>

## 編者序

本書は故島岩氏が平成12年度に金沢大学大学院社会環境科学研究科に提出した学位論文『バーマティー』の文献学的研究を改訂・編集したものである。その内容の中核をなすのは、インドの正統六派哲学の一つであるヴェーダーンタ学派の中でも最も重要な不二一元論学派において大きな位置を占める『バーマティー』という作品の核心的部分の詳細な翻訳である。

インド思想史上現代に与えた影響の最も大きかった哲学者シャンカラ（8世紀前半）の主著『ブラフマ・スートラ註解』に対する複注である『バーマティー』は不二一元論学派の思想的展開を理解する上で極めて重要なものであり、その中核的部分の翻訳が広く学界・研究者に向けて公刊されることは、日本と世界のインド研究の発展のために大いに期待されていたものである。氏の早すぎる死から思わぬ時が経ってしまったが、ようやくここに出版する次第である。

\* \* \*

島氏は1950年福井県生まれ。名古屋大学文学部哲学科を1973年3月に卒業、同年4月に名古屋大学大学院文学研究科博士課程前期課程東洋哲学専攻印度哲学専門に入学し、1977年3月に同大学院修了、同年4月に同大学院博士課程後期課程に進学した。この間、1974年9月から1976年3月までインドのプーナ（プネー）大学に、文部省（当時）の交換留学制度によって留学した。

1977年4月に進学した博士後期課程は、同年5月1日に名古屋大学文学部助手に就任するために、わずか1か月で中退した。そして、その後およそ10年にわたって助手の職にあったが、1987年4月に愛知学院大学文学部助教授に転じた。発足間もない国際文化学科の基礎を築いたひとりである。

1988年から1995年にかけては、アジア・アフリカ言語文化研究所の共同研究員として、「南東アジアにおける「正統」の波及・形成と変容」などの共同研究プロジェクトに積極的に参加し、*A Newar Buddhist temple Mantrasiddhi Mahāvihāra and a photographic presentation of gurumandalapūjā* の一書を *Monumenta Serindica* の一冊として AA 研から1991年に刊行している。

1991年4月には金沢大学文学部に助教授として着任し、2001年4月には教授に昇任し、金沢大学における研究と教育、さらに大学の運営に多大な貢献をなした。さらに、2005年4月から2007年3月には金沢大学共通教育機構副機構長、2007年4月からは

金沢大学大学教育開放センター長の要職を歴任したが、2007年5月12日、急逝した。享年57歳という早すぎる死であった。

島氏の学問的業績はきわめて多岐にわたるが、その中でヴェーダーンタ学派の『バーマティー』研究は根幹に位置している。プーナ大学への留学期間中に、おそらくその本格的な研究に着手したと思われるが、その後、1990年頃までのおよそ15年間にわたり、『バーマティー』に関する成果を継続的に発表している。本書の翻訳部分も、その初出は同時期に発表された学術論文である。そして、バクティやタントリズムなどの分野に手をひろげても、あるいはフィールドワークを精力的に行いつつも、つねに島氏の関心はこの哲学書にあり、文献学的な分析方法をその基礎に置いている。2002年に島氏が刊行した一般向けの概説書『シャンカラ』（清水書院）も、その成果のひとつである。

『バーマティー』とはヴェーダーンタ学派の最重要人物であるシャンカラ（8世紀頃）が創始した不二一元論学派に属するサンスクリット文献で、著者はヴァーチャスパティ・ミシュラ（10世紀頃）である。シャンカラの主著である『ブラフマ・スートラ註解』に対する複註で、その後、不二一元論学派がバーマティー派とヴィヴェラナ派に大きく二分される起点となった重要な文献である。島氏が本書で扱ったのはI.1.1からI.1.4までという、全体から見ればその一部にすぎないが、「ブラフマンの考察」を主題とした部分であり、『バーマティー』の中核に位置している。

島氏の学位論文は、『バーマティー』に関する本格的な研究であり、世界的に見てもきわめて価値が高い。ヴェーダーンタ学派の不二一元論学派というインド思想史における王道ともいえるべき分野に、果敢に挑んだ成果でもあり、これからこの分野をあつかう研究者にとって、第一に参照されるべき基本的文献となるであろう。

島氏は、この論文によって、平成13年3月22日に金沢大学大学院より博士（文学）の学位を授与された。審査にあたったのは、同大学院所属の杉本卓洲（審査委員長）、土屋純一、鹿野勝彦と、愛知学院大学の前田惠學の4氏である（いずれも所属は審査時）。なお、学位論文の要旨と審査結果が、金沢大学学術情報リポジトリ（KURA）で公開されているので、参照されたい（<http://hdl.handle.net/2297/4696>）。

島氏が金沢大学に提出した学位論文は全体が4部からなり、これに冒頭の「はじめに」と、巻末のAppendix、参考文献、「おわりに」が加わる。A4サイズ用の紙503ページにもおよぶ大作である。しかし、今回の改訂版刊行に当たり、その一部を割愛した。それによって、部立てや章立てなど全体の構成が変更された。学位論文と本書との対応は以下のとおりである（各章の副題は省略）。

学位論文	本書
はじめに	はじめに
第一部 インド思想の次元と軸	(割愛)
第二部 シャンカラの思想	(割愛)
第三部 『バーマティー』とその思想	第一部 『バーマティー』とその思想
はじめに 『バーマティー』の思想史的位置	序章 『バーマティー』の思想史的位置
第八章 不二一元論学派における無明論の一展開	第一章 不二一元論学派における無明論の一展開
第九章 On Pratibimbavāda in Advaitavedānta	(割愛)
第十章 不二一元論学派における解脱への道	第二章 不二一元論学派における解脱への道
第四部 『バーマティー』 I.1.1.-4 和訳	第二部 『バーマティー』 I.1.1.-4 和訳
Appendix	(割愛)
参考文献	参考文献
あとがき	あとがき

割愛した部分について説明を加えておこう。

「第一部 インド思想の次元と軸」と「第二部 シャンカラの思想」は、前掲の『シャンカラ』に、そのほぼ同一の文章が含まれる。具体的には『シャンカラ』の「I シャンカラをよりよく理解するために」が「第一部 インド思想の次元と軸」に、「II シャンカラの思想」が「第二部 シャンカラの思想」に相当する。一致しないのは、『シャンカラ』のほぼ終わりの部分に置かれた「シャンカラ的なるものと現代」(pp. 205-219)のみである。また、『シャンカラ』のこの部分に続く「あとがき／私がシャンカラに魅せられた理由」の前半部分 (p. 220 の 1 行目から p. 225 の 3 行目) は、学位論文の「あとがき」に相当する (後者の謝辞は除く)。ただし、内容に即して、一部の字句に変更が加えられている。学位論文をまとめている時期と、『シャンカラ』の執筆時期とがほぼ重なるため、両者を意識して執筆されたのであろう。

この部分は、学位論文のかかなりの割合を占めるため、本書の編集にあたっては、そのまま掲載することも検討されたが、すでに市販されている『シャンカラ』のほぼ全体を含むような出版物を、研究機関から刊行することは、社会的にも問題が大きいと考え、割愛することとした。

「第三部 『バーマティー』とその思想」の「第九章 On Pratibimbavāda in Advaitavedānta」は、章題に見られるように英文で執筆されている。本書全体の使用言語が日本語であることから掲載を見合わせた。なお、初出の論文は、金沢大学の学術情報リポジトリにおいて公開されているので、関心をお持ちの方は参照されたい (<http://ci.nii.ac.jp/naid/120000809086>)。

Appendix は『バーマティー』の翻訳箇所原文に関する異同対照表である。サンسكريット・テキストの諸本に見られる異同が、表形式でまとめられている。これは初出論文の表をそのままスキャナーで読み取り、その画像データを各ページに貼り付けていると推測されるが、島氏が使用した元のデータが見つからなかったことと、オリジナルの初出論文が電子ファイルで公開されていることなどから、同様に掲載は見送っ

た (<http://ci.nii.ac.jp/naid/110000042445>)。

なお、これらを含め初出論文の書誌データを、島氏は学位論文の中で明示している(本書 pp. 9-10、52-53 参照)。本書のこの箇所は学位論文の記述をそのまま再録しているため、割愛部分も含まれ、また、章立ても学位論文にしたがっている。

\* \* \*

島氏の死去は本人にとっても突然のことであった。金沢大学の島氏の研究室には、製本された学位論文が、机上に広げられたままになっていた。亡くなる数時間前まで、朱を入れていたのである。島氏が亡くなったのは帰宅後であるが、何もなければ、その翌日にも改訂作業を続けるつもりであったのであろう。文字どおり、島氏の絶筆である。

学位論文の刊行を島氏が企図していたことは明らかであるが、それがどのような形態であったかはわからない。全体はそのまま、細かい字句の訂正のみの刊行か、あるいは、全面的に書き改めたり、加筆を行うつもりであったか、今となっては知るよしもない。『シャンカラ』との重複箇所の扱いも不明である。翻訳部分が多いため、一般書として刊行するためには科学研究費補助金による出版助成なども予定していたかもしれないが、申請を準備していた形跡はない。

このような状況を鑑みて、島氏と同じ金沢大学の比較文化研究室に所属する森とアジア・アフリカ言語文化研究所において古くから故人とつながりを持っていた高島の両名が必要な編集作業を行なうことにしたのである。

両編者で編集方針を検討し、全体の構成と割愛部分の策定を行った。島氏自身による朱筆はすべて反映させ、明らかな字句の誤りには訂正を加えることとしたが、それ以外はできるだけ島氏の手稿をそのままとした。発表時期に幅があるため、表記の不統一が見られ、また最新の学術的成果が反映されていない箇所、あるいは文章が長く晦渋な部分もあるが、編者による加筆や補足は行わなかった。

本文がほぼ確定した後、高島が索引を作成した。学術書としての利用価値を高めるには索引は必須であるからである。島氏自身が翻訳箇所の一部について項目の選定作業を進めていたことを最大限に生かして、作業を行なったが、その実際については凡例を参照していただきたい。

校正やデータの修正など原稿のとりまとめ全般には、井田克征氏(金沢大学非常勤講師)の多大な御協力を得た。謝意を表する次第である。

高島 淳(アジア・アフリカ言語文化研究所)

森 雅秀(金沢大学人間社会研究域)

## 凡例

1. 本書は、島岩（1950–2007）の金沢大学大学院社会環境科学研究科博士論文『「バーマティー」の文献学的研究』（平成13年度3月）を基にして、著者が公刊のために準備していた原稿を編集し直したものである。
2. 島岩『シャンカラ』清水書院（2002）に相当する部分および英文部分と appendix は含まれていない。
3. 構成の変更による章番号などの変更、誤植の修正、幾つかの送り仮名の統一など以外に内容に関わる編集は行なっていない。
4. 番号ではなく\*のような記号による脚注は編者のものである。また「はじめに」などで[]による編者割り注をいくつか補った。
5. 翻訳部分で、行を単位に相互参照を行なっているので、欄外に5行単位の番号表示を追加した。そのような本書の内部での相互参照は編者が全面的にやり直した。その際に万一誤りなどあった場合には御寛恕の上、電子版の改善のためにご指摘いただければ幸いである。
6. 索引は、基本的に、著者がつけたものと編者がつけたものに別れる。
  - 著者は、『バーマティー』和訳序論、I.1.1 および I.1.2 の途中（第3節ただしその後にも数か所ある）までの『バーマティー』本文部分（シャンカラの『ブラフマ・スートラ註解』部分と脚注を含まず）について、訳語とサンスクリット語の原単語を対にした索引項目を付加していた。
  - これらについては、可能なものについて大項目に小項目を入れ子（下位項目）とする変更を加えてそのまま採用した。
  - 『バーマティー』の引用テキスト索引は脚注部分を参照しているが、それらは頁番号に n が付加されて索引にあらわれている。
  - I.1.2 から I.1.4 までの引用テキスト索引は『バーマティー』本文に限定するという同じ基準で編者が追補した。
  - 『バーマティー』和訳序論、I.1.1 および I.1.2 第3節（186頁）までについては、上記追補以外著者索引のみで、編者索引は追加しなかった。
  - 編者索引は著者索引をすべて抽出した上で、サンスクリット部分を削除して日本語のみとする原則で作成した。ただし「空」のような一文字語は全て除き、仮名まじりの3文字以下の語、2文字語などで余りに一般的な意味で用いられそうなものを削除した。論文においてのみ用いられそうな少数の術語を追加

した。

- 上記のように作成したリストを、長い文字連続から順次検索して、短い要素が二重にリストアップされない方式で索引化した。誤った形での索引化を避けるために、カタカナ語に関してはより長いカタカナ語の一部のみが索引化されること（「ヨーガ・スートラ」とある本文のヨーガの部分をヨーガで索引化すること）は避けるようにプログラムしている。同様に、3文字以下の漢字連続語についても、それより長い漢字連続の一部である場合には索引化しないように行なった。このような方式による索引化を、論文部分と『バーマティー』I.1.2 第4節以下に適用した。
- 従って、同一の語がサンスクリット語を伴っている場合とない場合で重複してあらわれている場合は、サンスクリット語を伴っているのが著者による索引で、そうでないのは編者による索引であることを示している。また、上記の原則によっているので、「空 *sūnya*」が一か所しか現われていないからといって、他の場所に「空」の語が存在していないことを意味しているのではない。



## はじめに

『バーマティー』の文献学的研究」と名づけた本研究は、ヴァーチャスパティ・ミシュラ（10世紀頃）がサンスクリット語で書いた、『バーマティー』というテキストに関する文献学的な思想研究である。このテキストは、インドの正統な六つの哲学学派の一つであるヴェーダーンタ学派のなかでも、シャンカラ（700–750年頃）が創始した不二一元論学派に属す哲学論書で、シャンカラの主著である『ブラフマ・スートラ註解』にたいする註釈文献である。従って、『バーマティー』の思想の理解は、シャンカラの思想の理解を前提とし、さらに、シャンカラの思想の理解は、インドの正統な六つの哲学学派の思想の理解を前提とする。そこで、本研究では、第一部でまずインド哲学における不二一元論学派の思想的位置を明らかにし、次に第二部でシャンカラの思想を明らかにし、その上で、第三部で『バーマティー』の思想を明らかにするという手順を踏むことにした\*。

次に、「文献学的研究」で私が意味しているのは、次のようなことである。まず、最も基礎的な作業として、諸写本の校訂を通してのクリティカル・エディションの出版がある。次に、テキストの翻訳研究がある。これは、テキストを翻訳し、現代のわれわれに理解可能なように訳注を付けるという作業である。インドというわれわれとは遠い世界の、それも古代や中世の思想を理解するためには、大きな言語障壁を越えることと膨大な予備知識とが必要とされる。従って、この作業は、理論的なものではなく極めて記述的な地味なものであるが、古典研究の分野では洋の東西を問わず古くから、高度な専門性を備えた基礎的な学問領域として確立しているものである。この作業の成果が、第四部<sup>†</sup>の『バーマティー』I.1.1-4 和訳」である。

その後、文献学的研究は、一般的には二つの方向に分かれる。一つは、テキストの思想の内容を、思想理解の前提となる予備知識を補足しつつ、テーマごとに整理しながら、そのテキストに固有の思想を抽出して提示するという、記述的な形の思想研究である。これは文献学的思想研究と呼ばれる。もう一つは文献学的な思想史研究である。すなわち、それは、テキストに述べられている思想を、主にそのテキストの前後の思想との比較を通して、インド思想の歴史的発展のなかに位置づけてとらえようとするものである。だが、インド哲学研究におけるこの種の思想史的研究には、西洋や中国の

---

\*本書には既に別の出版社から出版された第一部と第二部は含まれていない。また第三部のうちで英文で書かれた一章（原著での第9章）も割愛した。

<sup>†</sup>本書では第2部

哲学に関する思想史的研究とは、かなり異なるところがある。というのは、インド哲学とえば、サンスクリット語で書かれた哲学文献に見られる思想ということであり、サンスクリット語で書かれているということは、古代・中世の作品であるということであり、インドの古代・中世には、碑文以外にはほとんど歴史的な一次資料は存在していないという事情があるからである。すなわち、西洋や中国の思想に関する思想史的研究とは異なり、社会経済史的な歴史や民衆的な宗教・思想運動の動きのなかに、インド哲学の思想的発展を位置づけることは最初からできないのである。従って、その思想史的研究は、概念発達史的研究にならざるを得ないことになる。そしてここまでが、インド文献学における文献学的研究の守備範囲なのである。

さてそれでは次に、以上の前提をもとに、これまでのシャンカラ研究と『パーマティー』研究について概観することにした。

## シャンカラ研究の歴史

シャンカラの年代の問題、彼の書いたテキストの真偽の問題に関しては、完全にではないが、ほぼ決着している。また、シャンカラの真作とされる一六の作品<sup>1</sup>については、一作品を除いてすべて、完全なものとは言えないが、クリティカル・エディションと翻訳もすでに出版されている<sup>2</sup>。そのうち和訳があるのは、『ブラフマ・スートラ註解』<sup>3</sup>と『ウパデーシャ・サーハスリー』<sup>4</sup>の二作品だけである。だが前者は、大部の作品を最初に和訳した点は高く評価し得るものの、細かいところでは疑問の余地が多い。そのため本研究では、『ブラフマ・スートラ註解』I.1.1-4 という、ごく限られた冒頭部分だけだが、訳しなおすことにした。

次に、シャンカラの思想研究に関してだが、次のような三種類のものが認められる<sup>5</sup>。

### 1. 伝統的方法に基づく研究

これは、日本における真宗学や禅学に近い伝統的な教義学で、シャンカラの伝統を継承する者たちの信仰に基づく研究である<sup>6</sup>。だが、真宗学や禅学とは異なり、近代的

<sup>1</sup>第一部第一章第二節参照 [島 2002, p.19 以下]。

<sup>2</sup>前田専学, 1989a, pp.69ff. 参照。なお、一作品とは、『アーパスタンバ・ダルマシャーストラ』「アディアートマン章」への註釈である。

<sup>3</sup>金倉円照, 1989.

<sup>4</sup>前田専学, 1988.

<sup>5</sup>以下の分類は、前田専学, 1993 に従った。

<sup>6</sup>たとえば、シュリンゲーリにあるシャンカラ派の総本山の三四代目のシャンカラチャーリアであるチャンドラシェーカラ・パーラティーがサンスクリット語で著した *Vivekacūḍāmaṇiḥ* (シャンカラに帰せ

学問の洗礼を受けていない、極めて伝統的な形のものである。この種の研究は、われわれ外国人にとっては意味がないので、無視した。

## 2. 哲学的方法に基づく研究

これには、(1) 哲学的研究と (2) 比較哲学的研究の二種類が認められる。

### 2.1. 哲学的研究

シャンカラの思想に現代的な意義を見出そうとする哲学的研究の代表的なものには次のようなものがある。

Eliot Deutsch, *Advaita Vedānta: A Philosophical Reconstruction*. Honolulu: University Press of Hawaii, 1973.

Debabrata Sinha, *The Metaphysic of Experience in Advaita Vedānta: A Phenomenological Approach*. Delhi: Motilal Banarsidass, 1983.

だが、私は、この種の研究には否定的である。なぜなら、シャンカラの思想は、輪廻から解脱へという宗教的価値の枠組みのなかで成立している神学であって、いわゆる哲学ではなく、従って、現代的な宗教的意義ならいざしらず、哲学的意義をそのなかに見出せるようなものではないと考えるからである。

### 2.2. 比較哲学的研究

比較哲学的研究はさらに、内容的に二つに分かれる。まず一つは、インド人がシャンカラの思想を西洋の思想と比較して、その普遍性を西洋に向かって提示しようとするタイプのものである。その代表的なものには次のような研究がある。

A.C. Mukherji, *Some Aspects of the Absolutism of Shankaracharya: A Comparison between Shankara and Hegel*. Allahabad: Allahabad University Press, 1928.

P.T. Raju, *Thought and Reality: Hegelianism and Advaita*. London, 1937.

S.N.L. Shrivastava, *Śaṅkara and Bradley: A Comparative and Critical Study*. Delhi: Motilal Banarsidass, 1968.

---

られる『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』にたいする註釈), Bengalluru Press, 1958 などが、それである。

もう一つは、欧米人が、キリスト教という恩寵の宗教のなかでの異端である西洋の神秘主義を、シャンカラに代表されるインドの神秘主義と比較することで、神秘主義が持つ普遍性を、どちらかといえば西洋に向けて提示しようとするタイプのものである。その代表的なものには次のような研究がある。

R. オットー (Otto) 『東と西の神秘主義』(華菌聰磨・日野紹運他訳) 人文書院、1993.

J. F. Staal, *Advaita and Neoplatonism: A Critical Study in Comparative Philosophy*. Madras University Philosophical Series 10. Madras: University of Madras, 1961.

このような関心と比較の方向性の相違は認められるものの、両者はともに、自らの伝統に所属する思想に、その比較の軸の一方を置いているという点では共通である。そして、そういった形の比較であるからこそ、意味ある比較になっているのである。だが、われわれ日本人にとっては、この種の研究は成立しにくい。その理由は次の通りである。

(1) 日本人にとって、日本の思想をシャンカラと比較して論じても、日本の思想の普遍性を世界に向かって主張するということにはならない。なぜなら、インド人にとってそうだったように、日本人にとっても、普遍性を主張する相手は、一貫して西洋だったからである。

(2) どちらかといえば汎神論的な日本の宗教的風土のなかに、絶対者と自己との直接的な合一といった神秘主義を見出すことは困難である。従って、日本とインドの神秘主義の比較というような形の比較は成り立ちにくい。

(3) 日本には仏教的伝統が存在し、この伝統はもとをたどればインド起源のものである。従って、シャンカラの神秘主義と日本の仏教の神秘主義(たとえば密教)とを比較しても、それは所詮、インド系の思想どうしの比較であって、東西の神秘主義の比較とは異なり、対比がしにくい。そのような比較を行うくらいなら、インドの密教と日本の密教を比較して、その相違と密教の日本における変容を明らかにしたほうがましである。

だが、これら二つのタイプの比較哲学的研究のうちで、欧米人の研究に関しては、先の哲学的研究とは異なり、シャンカラの思想を哲学というよりはむしろ、宗教神秘主義だととらえている点は評価できる。このような観点は、本研究におけるシャンカラの思想理解においても共有するものである。

### 3. 文献学的方法に基づく思想研究

これは、シャンカラの著作に見られる思想の内容を、思想理解の前提となる予備知識を補足しながら、テーマごとに整理して提示しつつ、シャンカラに特有の思想を抽出するという、記述的な形 of 思想研究である。一つのテキストに見られる思想に関する研究もあれば、複数のテキストに見られる思想を総合的に理解しようとするような形のものもある。その代表的なものには次のような研究がある。

P. Deussen, *The System of the Vedānta* (tr. by C. Johnston). Delhi: Motilal Banarsidass, 1972(1923).

O. Lacombe, *L'Absolu selon le védānta*, Ministère de l'éducation nationale et des beaux arts, Annales du musée Guimet, Bibliothèque d'études – Tome 49. Paris: Librairie Orientaliste Paul Geuthner, 1966(1937).

H. v. Glasenapp, *Der Stufenweg zum Göttlichen*. Baden-Baden: Verlag Hans Böhler Junior, 1948.

N. K. Devaraja, *An Introduction to Śaṅkara's Theory of Knowledge*. Delhi: Motilal Banarsidass, 1972(1962).

中村元『シャンカラの思想』（インド哲学思想 5）岩波書店, 1989.

本研究の第二部\* 「シャンカラの思想」において採用したのは、この文献学的な思想研究の方法である。ただし、この種の研究は、ここに挙げたようにすでに数多いので、インド思想に共通する座標軸の上でシャンカラの思想を理解するという、新たな理解の方法を提示し、それに基づいた。

### 4. 文献学的方法に基づく思想史研究

前田専学氏<sup>7</sup>によれば、彼も採用する歴史的・文献学的方法に基づく研究の主要なテーマには、以下の四つがあるとされる。

- (1) シャンカラに帰せられる著作の真偽性の決定と真作の批判的出版。
- (2) シャンカラ特有の思想の抽出。
- (3) シャンカラと彼以前および以後の哲学者との比較研究。
- (4) シャンカラの歴史的背景。

このうち (1) はすでに述べたようにすでにほぼ終了している。(2) は私の分類では

---

\*島 2002, p.95 以下。

<sup>7</sup>前田専学, 1993, p.26.

上記の文献学的な思想研究に相当する。(4)は、すでに述べたように、インド古代・中世史自体が資料的に成り立ちにくい現状では、思想文献から歴史状況を推測するという離れ業を行わざるを得ないため、なかなか困難であり、存在しないに等しい。従ってここでは、(3)すなわち概念発達史的な思想史研究について紹介することにする。その代表的なものには次のような研究がある。

### 1. P. Hacker の研究

- (a) *Untersuchungen über Texte des frühen Advaitavāda 1. Die Schüler Śaṅkara*. Akademie der Wissenschaften und der Literatur: Abhandlungen der Geistes- und Sozialwissenschaftlichen Klasse 26. Wiesbaden: Verlag der Akademie der Wissenschaften der Literatur in Mainz in Kommission bei Franz Steiner Verlag GMBH, 1950.
- (b) *Vivarta: Studien zur Geschichte der Illusionistischen Kosmologie und Erkenntnistheorie der Inder*. Akademie der Wissenschaften und der Literatur: Abhandlungen der Geistes- und Sozialwissenschaftlichen Klasse 5. Wiesbaden: Verlag der Akademie der Wissenschaften der Literatur in Mainz in Kommission bei Franz Steiner Verlag GMBH, 1953.

### 2. 中村元の研究

- (a) 『初期のヴェーダーンタ哲学』(初期ヴェーダーンタ哲学史 1) 岩波書店 1981(1950).
- (b) 『ブラフマ・スートラの哲学』(初期ヴェーダーンタ哲学史 2) 岩波書店 1981(1951).
- (c) 『ヴェーダーンタ哲学の発展』(初期ヴェーダーンタ哲学史 3) 岩波書店 1981(1955).
- (d) 『ことばの形而上学』(初期ヴェーダーンタ哲学史 4) 岩波書店 1981(1956).

### 3. 前田専学の研究

- (a) *A Thousand Teachings: The Upadeśasāhasrī of Śaṅkara*. Tokyo: Hokuseido Press, 1979.
- (b) 『ヴェーダーンタの哲学—シャンカラを中心として—』(サーラ叢書 24) 平楽寺書店, 1980.

このうち、中村元氏の研究は、シャンカラ以前のヴェーダーンタ哲学の状況を明らかにすることによって、シャンカラのヴェーダーンタ思想史上の位置を明らかにしたものである。一方、P.Hacker および前田専学氏の研究は、シャンカラ以降の不二一元論学派の思想的発展との関わりから、シャンカラの思想的位置づけを行ったものである。だが、それらとともに、前田専学氏のシャンカラの思想とサルヴァージュニヤートマンの思想との比較を唯一の例外として、シャンカラの四人の直弟子たち(スレーシュヴァラ、パドマパーダ、トータカ、ハスターマラカ)の思想との比較に留まっている。すなわち、それ以降の不二一元論学派の思想的展開をも視野に入れた形で、シャンカ

ラの思想的位置づけを行おうとする研究は、いまだ存在しないのである。

## 不二一元論学派研究の歴史

シャンカラの直弟子以降の作品に関しては、一応、現段階で、そのほとんどのものについては、クリティカル・エディションはすでに出版されており、また、翻訳に関しても、必ずしも十分なものとは言えないが、英訳がほぼ出そろっている<sup>8</sup>。だが、著者および作品の年代に関しては、まだ十分に確定しているとは言えない。また、部分的には、個々のテキストに関する文献学的な思想研究も行われてはいる<sup>9</sup>。だが、すでに述べたように、直弟子の後の思想的展開に関しては、研究はいまだ存在しない。それが、全般的な研究の状況である。

本研究で扱うテキスト『バーマティー』は、このシャンカラの直弟子の少しあとに位置する作品で、ほぼ 10 世紀頃のものである。この時代に活躍した不二一元論学派の思想家には、P.Hacker によれば、『バーマティー』の著者ヴァーチャスパティ・ミシュラ、『ヴィヴァラナ』の著者プラカーシャートマン、『イシュタ・シッディ』の著者ヴィムクタートマンがいるとされる<sup>10</sup>。このうち、『バーマティー』と『ヴィヴァラナ』は、後世、不二一元論学派が、バーマティー学派とヴィヴァラナ学派とに二分されるに至る起点となった作品であるという意味で、極めて重要な作品である。だが、その研究に関しては、次のようなものが存在するのみである。

S. S. Suryanarayana Sastri, *The Bhāmatī of Vācaspati on Śaṅkara's Brahmasūtra-bhāṣya (Catuṣṣūtrī)*. Madras: Theosophical Publishing House, 1933. (『バーマティー』 I.1.1-4 の英訳)。

S. S. Hasurkar, *Vācaspati Miśra on Advaita Vedānta*. Darbhanga: Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning, 1958. (『バーマティー』の文献学的な思想研究)<sup>11</sup>。

K. Cammann, *Das System des Advaita nach der Lehre Prakāśātman's*. Münchener Indologische Studien Bd. 4. Wiesbaden: Otto Harasowitz, 1965. (『ヴィヴァラ

<sup>8</sup>前田専学, 1980a, 37ff. および島岩 1980b, 1980c 参照。

<sup>9</sup>島岩 1980b, 1980c 参照。

<sup>10</sup>Hacker, 1953, p.44 参照。ただし、三者とも、必ずしも年代が確定しているわけではない。たとえば、G. Oberhammer はヴァーチャスパティ・ミシュラの年代を 841 年頃とし、また、S. Dasgupta は、プラカーシャートマンとヴィムクタートマンの年代をともに、1200 年頃としている。Cf. 金沢篤, 1987 および Dasgupta, 1973, p.30 and p.198.

<sup>11</sup>他に、未刊のものとして、Joshi, 1958 があるが、これは刊行されることのなかった博士論文であり、内容的にはあまり参考にならない。

ナ』の文献学的な思想研究)。

B. K. Sengupta, *A Critique on the Vivaraṇa School*. Calcutta: Firma K. L. Mukhopadhyay, 1959. (ヴィヴァラナ派の思想の記述的な研究)。

すなわち、両テキストとも、全訳はいまだどの言語でも存在せず、さらには、文献学的な思想史研究にいたっては、その研究は皆無であるというのが現状なのである。

## 本研究の意義・研究の方法・論文の構成

以上のような研究の現状を踏まえた上で、本研究が行おうとしたのは、次のようなことである。

(1) 『バーマティー』のなかで、その全体の思想が凝縮された部分であるという意味で最も重要な I.1.1-4 の個所の和訳を行い、詳細な訳注をつける。

(2) その上で、『バーマティー』に見られる思想を、シャンカラ以降の不二一元論学派で最大の問題とされた無明の問題を中心に、シャンカラから『ヴィヴァラナ』までの思想的展開のなかに位置づける。その際、依拠するのは、P.Hacker や前田専学氏に代表されるような、概念発達史的な思想史研究の方法である。

(3) その際、シャンカラの直弟子から『バーマティー』を経て『ヴィヴァラナ』に至る思想の発展自体が、シャンカラの形作った不二一元論の枠内で行われているので、その不二一元論という思想的枠組およびその思想的枠組自体が、インド哲学のなかでどのような位置にあるのかという点については、まず第一に明らかにしておく必要がある。

そのため、本論文の構成は、次のようなものとなる。まず、第一部「インド思想の次元と軸」では、ヒンドゥー教におけるインド哲学の位置と、インド哲学における不二一元論学派の思想的位置を明らかにする。なおこれまで、これだけ視野を広くとって、シャンカラおよび不二一元論学派について論じた研究は存在しない。次に、第二部「シャンカラの思想」では、シャンカラの思想を、明知と無明という二つの次元と、インド思想に共通する四つの座標軸（精神と物質、実在と非実在、原因と結果、行為の肯定と否定）に基づいて明らかにする。この際に用いる方法は、すでに述べたように、文献学的な思想研究の方法である。次に、第三部「『バーマティー』の思想」では、後世、バーマティー学派とヴィヴァラナ学派を区別する指標となった、主に無明に関する三つの問題（無明の基体の問題、映像説と限定説の問題、解脱への道における瞑想の位置の問題）に関する、シャンカラから『ヴィヴァラナ』までの思想的展開のなかに、



『バーマティー』の思想を位置づける\*。

なお、本論文のもととなった既刊の諸論文は以下の通りである [本書で関係するのは以下で8章と10章と記されているもののみ]。

1. 「ブラフマンと現象世界との関係—実在と非実在との関係—」『東海仏教』23 輯、1978.05、pp.115-126。(第五章に相当する)。
2. 「ブラフマンと現象世界との関係—因果律を中心として—」『仏教学』8号、1979.10、pp.69-86。(第六章に相当する)。
3. 「シャンカラにおける解脱への道とその理論的根拠」『日本仏教学会年報』45号、1980.03、pp.39-50。(第七章の第二節と第三節に相当する)。
4. 「Bhāmatīにおける無明と附託」『印度学仏教学研究』31 卷 2 号、1983.01、pp.293-297。(第八章の一部に相当する)。
5. “The Relationship between Brahman and the Phenomenal World in Śaṅkara’s Philosophy”『名古屋大学文学部研究論集』(哲学 30)、1984.03、pp.23-35。(第六章に相当する)。
6. 「不二一元論学派における解脱への道—『バーマティー』における祭式と瞑想と知識—」『宗教研究』60 卷 2 輯、1986.10、pp.237-258。(第 10 章に相当する)。
7. 「不二一元論学派における顕現説と映像説と限定説」『印度学仏教学研究』35 卷 2 号、1987.03、pp.972-977。(第九章の一部に相当する)。
8. 「不二一元論学派における無明論の一展開—無明の基体に関する問題を中心として—」『仏教思想史論集』(成田山仏教文化研究所紀要 11) 成田山新勝寺、1988.03、pp.221-236。(第八章に相当する)。
9. “Śaṅkara’s Interpretation of the Bhagavadgītā”『印度学仏教学研究』39 卷 1 号、1990.12、pp.501-504。(第七章第四節の一部に相当する)。
10. 「シャンカラのギター解釈」『仏教文化史特集 II』(成田山仏教研究所紀要 15) 成田山新勝寺、1992.03、pp.187-205。(第七章第四節に相当する)。
11. “Historical Development of Salvation Theories Found in Commentaries on the Bhagavadgītā : From Śaṅkara to Rāmānuja”『南アジア研究』4、1992.10、pp.1-14。(第七章第四節の一部に相当する)。
12. 「ジュニャーネーシュワルのギター解釈—特に五、六章を中心として」『今西順吉教授還暦記念論集：インド思想と仏教文化』春秋社、1996.12、pp.29-42。(第一章の一部に取り入れられている)。

---

\*先述したように本書には上記の第一部第二部は含まれず、上記の第三部が第一部、第四部が第二部という構成になっている。

13.“On Pratibimbavāda and Avacchedavāda in Advaitavedānta”『南アジア研究』12, 2000.10、pp.29-49。

なお、本論文の第一部と第二部は、『シャンカラ』（人と思想）清水書院として、刊行される予定である\*。

また、第四部に関する初出論文については、第四部の「はしがき」で言及することにする。

---

\*島 2002 として刊行された。